

「神に用いられる」

ルカによる福音書 19章28節～34節

事務総局総局長 安藤 守

私の母は、1921年に牧師の家に生まれ、キリスト教の世界の中で育てられ、女子聖学院を卒業しています。どのような女性であったかといえますと、イエスの話にじっと耳を傾けるマリアではなく、イエスをもてなすためにあくせくと働くマルタのような生き方をした女性でした。母は、仕事はもちろん、家事も子どもの学校のことも近所付き合いも教会の奉仕もきちんとしていました。しかし、歳を重ねるに従い認知症が進み、それが出来なくなっていました。何度もフライパンや鍋を焦がしました。大きくもない家の中で迷子になることもありました。また、ありもしないものが「見える」、聞こえない音が「聞こえる」と言い始め、家族は振り回され、母から目を離すことができなくなりました。面倒を見ていた妻は体調を崩し、母は、東京を離れ姉が住んでいた静岡にある老人介護をする施設に入りました。母は、姉が通う教会に出席していましたが、礼拝中はほとんど寝ていたようです。それでも母は礼拝に出席できることを喜んでいました。しかしその一方で、できることがどんどん少なくなっていく自分に、人の世話を受けるだけで人のために何もできない自分に悩み、悲しみ、苦しんでいました。母は、2011年1月に体調を崩し、その年の5月に天に召されました。母の亡骸を棺に入れる納棺式を静岡の教会で行いましたが、その時、参列して下さっていた教会のお年寄りが、「安藤さんが教会に通われている姿に励まされ、私は教会に来ることができました」とおっしゃってくださいました。私はこの言葉に本当に慰められました。確かに母の晩年は、身体も頭も若い時のように働かなくなり、人に助けをもらうばかりのものでした。しかし、決して空しいものではなかったと私は確信しています。静岡の教会のほんの僅かの人かもしれません、もしかしたら一人だけだったかもしれませんが、母の姿に励まされ、自分も教会に行こう、前を向いて生きようと思った人がいたからです。何の役にも立たない、何の働きもできないと嘆いている一人の老人を、本人も知らないところで神が用いてくださり、人生の最後に一輪の花を咲かせてくださったのだらうと思います。

私たち一人ひとりには、「主がお入り用なのです」と聖書を通して言葉をかけられています。この言葉に対し私たちは喜びと畏れをもって「主よ、お話してください。僕は聞いております。」と主のみ旨を尋ね求める者でありたいと思います。

(祈り)

ご在天の父なる神様、礼拝する恵みを与えられましたことを感謝いたします。

あなたは、私たちの髪の毛一本残らず数えるほどに私たちのことをお知りになっております。どうぞ、一人ひとりにあなたの栄光をあらわす生き方をお教ください。そして、あなたが用いてくださり、私たちを平和と希望と喜びをもたらす者へとさせてください。

主イエスキリストの御名によってお祈ります。アーメン

2021年6月25日 聖学院大学 全学礼拝